

第2回やまぶき会医療分科会 講 話

心の故郷

三浦俊良先生

皆さんお久しううございます。もうみんなの頭が白くなっているんです。それはいけないと思いますね。頭を染めてください。お医者さんが若いですね、かかるほうも元気が出ますけど、頭が白くなると、元気が出なくなると思うんです。なぜ私が、先ほどから皆さんを卒業生なのに「先生」というかと言いますとね、命を預かる尊い仕事を皆さんはしていらっしゃるんです。だから、サラリーマン根性を出したらいけないと思うんですよ。命をかけて、仕事をしていただきたい。私は87歳の今日まで生きてきて、そう思い続けておるんですよ。「生半可な月給取りではいけない。インテリ文化人になってはいけない。本当の運命共同体を背負っていくような、そういう人間になってほしい」という願いは今も消えてないんです。

あんたの方はなぜお医者さんになったか理由があるはずです。

私は幼稚園のお母さんに話す時はこの文を読みます。「僕のお母さん、僕の胸の中に、お母さん、お母さんといぐら呼んでも返事はしてくれません。あのやさしいお母さんはもう僕のそばにいないのです。亡くなってしまったのです。去年の12月20日に鎌倉の病院で長い病気の後、亡くなっています。今、僕は楽しみにしていた小学校1年生になり、毎日元気に学校に行っています。新しい洋服、新しい帽子、新しいランドセル、新しい靴を履いて立派な1年生になりました。お母さんに見せてあげたいと思います。僕は赤ん坊の時、お父さんを亡くしたので、兄弟もなくお母さんと二人で来ました。そのお母さんまで僕だけを一人おいてお父さんのお墓に行ってしまったのです。今僕はおじいさんとおばあさんのうちにいます。毎日学校に行く前にお母さんのいるお仏壇に向かって手を合わせて「行って参ります」とするので、お母さんがすぐそばにいるような気がします。勉強を良くし、おりこうになり、お父さんお母さんに喜んでもらえるような良い子になります。でも学校で先生がお父さんやお母さんの話をする時、僕は寂しくて寂しくてたまりません。でも僕にはお母さんがあります。僕の胸の中に居て、僕のことを見ています。僕の大好きなお母さんはお隣のミ一坊のお母さんよりヨッチャンのお母さんより一番良いお母さんです。お母さん、僕は勉強して立派な人になりますから、いつまでも僕の胸の中からどこにも行かないで見ていてください。」というものです。

子どもがこういうような子どもにならないのなら、親ぶってはいけないと思うんです。先生になってはいけないと思うんです。学校の先生やお坊様やいろいろありますけど、お医者様になる時はそういう精神が大事だろうと思うんです。「小児科は今はやらんから、どこの大きな病院も小児科を少なくする」そういうことばっかりお医者さんの世界をしてですね、病院はただ儲け主義ばっかりで、老人ホームも儲け主義医者、坊主も丸儲けそんなことばっかり、物質主義の中に生きてですね、洛南高校だけでもせめてそんな学校でなくて欲しいと私は思うんです。今日私がここで叫びたいのは、お医者さん方は、自分が怒られる役より、怒る役になって下さい。私もね小さい時、両親を亡くして、それこそ苦労してきました。しかし本当に叱られたという事はありません。いじめられました。高野山でもいじめられ、上海くんなりまで参りました。東寺に昭和18年にはいりまして今日に及びます。その時本当に怒ってくれたのは師匠の山本忍染という方でした。本当に愛情を持って叱ってくれた。教育で何でも愛の鞭がなくては育たないと思うんです。なんでもアレをしてはいけない、あれもしてもいけない。権利がある。権利があるなら義務があるのですね。義務も果たさずに権利ばかりを主張するそういう風潮があります。話はとびとびになりました。勘弁してくださいね。

因縁と申しますが、因ということは可能性ですかね。可能性、どうでもなる可能性。縁とはその可能性を具体化した形で表現するものでしょう。人間は条件的存在であるということですね。そう

いう人間が悪くもなれば良くもなるということは、教育という一言につきると、ただ私は今、幼児教育を125歳まで生きてやりたいとこう願いたてていますが、明日死ぬかもわかりません。成基学園にいた時の5年間平沢興先生と毎月会いました。いつもあの方が教えてくれました。「先生、長生きするのはどうしたらいいのですか。」と言ったら、「長生きする方法はありませんよ。」と「長生きしたらこうしたらよかったです。」とおっしゃったんです。先生はいつ頃お亡くなりになるんですか。」って聞いたら、「まあ88か9で、おそらく90まではいかんでしょう」といってたら、88で亡くなつたんですよ。ほんとにその死ぬ前の月に私は、「長生きしなさいよ。」といって泣いてくれたんです。それを今、私は感心するのはですね。ああいう方でも、また私の人生の師である安田理人先生でもですね、死ぬまで学生であったと。救道者であったと。道を求めて求めて、死んだ時は終わりです。それをもう「医学博士」になった。これでなつたんだと思うのは間違い！なつたと思った途端に転げ落ちると思うんです。虎頭先生が「ミスをするのはね、お医者さんが、傲慢だから」と言ってくださいというておられた。そんなこと言うたら怒られますけどね、「何を言ってますか、」といわれるかもわからん。

東井義雄先生はこういう事をおっしゃっています。「悪人が救われるという事は、全てが救われるということです。親も真実の親は全てを救ってくれます。教師も真実の教師は全てを救おうと願います。少なくとも親や教師はそれを願いとしなければなりません。学校にもその願いがこもってなければなりません。親御さんはどの親御さんも我が子が人間に生まれさせてもらってよかったです。十分に生きがいに燃えて、させてやって下さいと、願いをこめて子どもさんを学校に送っておられるのです。つまりどうか救ってやって下さい。と期待をこめて学校に送っておられるわけです。ところが学校という所がそういう所であるのにそれで仕事をする先生が、先生のいう事をよく聞く子や勉強のできる子供の方がばかり見ていて、わかりたいのにどうすればわかるようになるのか、それがわからなくて困っている子、いい子になりたいのにどうすればいい子になれるのかわからなくなつて迷っている子、本当の癒し方がわからなくてやけくそにならずにおられない子の方を見てくれない学校が生まれているのではないか。この子さえいてくれなかつたら、そんな泣き言をいうのは本当の先生ではないということです。そういう泣き言をいうのは、本当の親ではないということです。そういう子供こそ親を本当の親にし、先生を本当の先生にし、学校を仏様が喜んでくれるような本当の学校にするために現れてくれているのかもしれません。相次ぐ自殺事件、いじめの事件、殺人、親や先生や学校に対する子供たちの、「本物になって下さいよ。」という叫びではないでしょうか。本物になる事は勿論容易なことではありません。阿弥陀様のような仏様でも全てを救うことができるようになるまで仏と呼んでくれるな、五劫という計り知ることができない長い間思案し修行されたといいますから、ですから少なくとも子供たちの自殺行為や殺人行為や非行は他人事ではなくて本物の親になる事、本物の教師になること、本物の学校を作ることを忘れている私への鞭と受け止めさせてもらわなければならないのではないか。」というのが東井先生のお言葉でした。

洛南には昭和37年、私が49歳の時に入りました。そして先生方と共に歩いて74歳、昭和62年に辞めるまで、先生方と一緒に歩いてきました。今のように日本一に頭がよければいいというのではない。何でも道の中どころがいいのですよ。人間というのは中度と仏教で申しますが、「高慢か卑下慢か？」、人間はコンプレックスの塊です。「教育とは何をやるのか？仏教とはなぜあるのか？」。コンプレックスの克服にかかり果てる。ちょっと医学が上手になれば、お医者さんになれば鼻が高くなりし、ちょっとすれば「しまった」と思うし、卑下し、較べ合い、高慢、常に中度がないわけですね。私達は常に中度の心、平常心でいく方法はないのかと行くのが仏教の教えだと私は思います。富先生の頃、宗教の時間によく言いましたね。水というものがありますね。化学ではH₂Oといいます。「本当の水」とはなにかというと、運動し働いて家に帰って、水が欲しい時に、飲む、それが血となり肉となり本当にうまかった。これが本当の水ではなかろうか？それをただ化学、皆さんがお医者さんになって「オレは科学者だ、医学だ、もう仏教なんか問題ではない、わしはもう科学者でダンナになった」と思いになったと思います。しかし40歳になって子供を持ち、子供がすねたりいろいろしてきて、自分も将

来を考えてもう80歳まで40年しかない。まだ40年あると。しかしすぐです。白髪がぽつぽつ生えてくる。しづがよってくる。腹も出て来る。すると寂しくなります。その時何を支えとしていきますか？やっぱり、人のために長生きした人のことばを聞くとただ一つあるんです。「してやった」という心ではなくて、「ありがたい。もったいない。ありがとうございます。世の中のためになにかさせていただきたい。」という心の人 beaucoupございます。

人の命の尊さ、命は本当に、よく安田先生が私によく言ってくださいました。「命の次に2番目に大事なのがなにか三浦君知ってるか？」「知りません」といたら「お金ですよ。金を馬鹿にしたらいけませんよ。金を馬鹿にしたら金から復讐されますよ」「なぜですか」というと「命を買えるじゃないですか。買えるけれど人間は死ぬわね。絶対という事は一つしかないんです。生まれたものは死ぬということです。他に絶対違うということはないと思う」という事を私に教えてくれました。

今日私は病人を扱う先生方にこういう事をいうのは失礼かと思いますが。この間平野先生に私が「告知を今するんですね。ああいう事はキリスト教ではありますけど、仏教ではまだありませんが」というと「今そうすることになっています。」とおっしゃったね。「なっとる」では私はいけないと私はいます。なっとると決めてしまってなったんではいかん。病人がどうに受け入れるか？どのように受け入れるか？受け入れてね、もだえて、安らかにそして仏様の顔をみて亡くなっていくか。そういうところに、医学の問題があるのではないかでしょうか。

私は安田理深先生という人生の師に合って「貴方は何になるために出家したのか？」「出家の本懐はなにか？」と聞かれた時に38歳でした。それまで何とか何とか歩いてきたけど手探りでした。

38歳にして「貴方は東寺のような大きな寺における事もいいでしょう。葬式をするのもいいでしょう。法事をするのもいいでしょう。しかし一番大事なことは東寺の国宝の番をするより大事なことは中学、高校以下の思春期にあんたの話を静かに1時間でも聞けるような子どもを、人作りをしたらどうですか」と言われたんです。幼稚園を建てた年です。38歳です。それから10年間考えて、先生に「金が無いんです。」「金があったら学校は出来ません。金があったら高利貸しになるだけです。」「何があったら良いんでしょうか？」と聞いたら、「本願ですよ」「本願とは何ですか」と聞いたら「あなたの生きた生き甲斐ですよ。」「今あれがほしい、これがほしい。位がほしい。」と思うけれども、本当に欲しいものは何か？それは自分が命を捨ててもいいようなかけるものがあるはずです。それを本願と言うんですよ。本願に会わなければですね、出来ません。」そういうことなんです。本願！本願！。それで安田先生の講義をずっと聞いてきた。30年間生きていらっしゃる間、聞いてきたんです。安田先生の話を聞いて、本当に青少年にどのようになってもらいたいという願いをたて、人の為に自分を捨ててですね、清潔にして規則正しく心豊かに情操豊かに温かい心をもって思いやりがある事、それが「自己を尊重し真理を探求し社会に献身しよう」という事である事を、私は21日に言い続けて25年間きたのです。それが今はその言葉がないんですよ。洛南の精神は校歌と校訓にあるんです。自分が苦労して思いやりの心が出てくるのであって、苦労しない者が思いやりが出てくるとは私は思いません。そのように思います。私は先生方にどうか信頼されるお医者様になってほしいと、儲けなくてもいい、儲けるのはご自由です。でも、信頼される先生になってほしい。あの先生から脈を見ていたいで「もうあんた終わりです」と言われたら諦められるような、そういうお医者さんになってほしいです。

「年をとればどうなるか」というと、年をとればひがみ、そして悟りきって本当に澄ました人になるということは間違いだと。年をとるほど人間は生臭くなるんだ、汚い。それが、悟りきったと言う事はないと思う。悟ったといったら鳥肌立つと思うんですよね。毎日歩く。私は毎日ですね、4000歩、5000歩、毎日6000歩 歩こうと、歩き続けて人生を終わろうと、こう思うわけです。私は責務は何かを考え、世界がどうなるだろうか、たとえば洛南はどうなっていくだろうか、宗教はどんなだろうか、何か一つ問題を問題としてかかえて、自分の問題として生きていくと言う事が無かつたら生きられないと、私は思うのです。ですから、心と体の先生方ですから、特にそういうことをお願いしたいんです。

私はまあ長いこと今日は言うつもりはありませんけどね。まあ、ひとつ洛南高校時代を思い出して下さい。それは私はね、今日何も題を持たないのはね、心の故郷ということです。題があれば。もし心の故郷とするならば、洛南が心の故郷であると。卒業式の時、私はいつも先生方に、生徒さんに「困ったことがあつたら帰ってきなさいよ」と言つたはずですよね。その卒業生が残してくれた文章があります。少しは聞いてくれますか。いいですか。聞いてください。これはですね、洛南高校の1年生の初めての4月21日の感想文です。「4月21日午前9時58分、僕はかねてから大変興味をもつていた御影供という儀式に参加した。そして校長先生の講話に関して感じたことを書こうと思う。校長先生は冒頭に勉強することについておっしゃった。最近、多発する校内暴力というのは、衣食足りて礼節を知れ、ということばがあるが、衣食足り過ぎて損なっているのだと言われた。僕は本当に納得した。中学生時代に先生に嫌われていた生徒、単車を乗り回す生徒、タバコを吸う生徒、など数多く現状を僕は見てきた。付き合ってもきた。しかし、ぼくは決してそうしなかった。そうした気持ちは勿論あったが、正直に言って、今もある。けれども、校長先生が言わされた、「欲というものは一つ与えられれば次へと続くものである。当時また現在その気持ちは抑制している、将来というものがあるからだと思う。自分の将来を見極めれば今何をしてはいけないのか、今何をするのかは、すぐにわかるからくる。校長先生はお釈迦様の言葉を引用してこう言われた。「人生は苦なり。」だから僕は今までできる限り欲を捨てて勉強に専念し、横道にそれずに来たことを本当によかったです。そして、これからも苦労あるだろうし、あって当然だと覚悟している。一時僕はこう思った。人間はいつ死ぬかわからない。百年後、10年後、あるいは明日死ぬかもわからない。そう思うと今日遊んでおかなければ折角人生はつまらない。もっともっとしたいことをしておかなければ損ではないか。それなのになぜ勉強なのか。なぜ宿題なのかとそう思った。しかし今は違う。それは将来のために苦労して大人になり、そして苦労していき、最後に死ぬのだ。たとえ死ぬにしてもその間、遊べばいいというものではない。またそれはまったく自分のためである。現実は、両親をはじめ学校の先生や社会の人達に非常にお世話になっている。言い換れば、すねをかじっている。その恩をかえせるように、また社会に献身できるように勉強を励みたいものだ。学問に生きるか、スポーツ選手として生きるか、僕は学問の道を進もうと思っている。きっとその道は険しいだろうが初めての御影供で、校長先生の話を聞き、改めて規則の厳しい洛南に入ることができてうれしいと思う。また私は思った。3年間よろしくお願ひいたします。」とこう書いてあるんです。そのお母さんに会いました。このお母さんすばらしいお母さんでした。やっぱり。だからねわたしはお釈迦様が三千年の昔、初めてね、人間は笑顔を持つものだと言う事を、おっしゃったんです。それはね、どういう事かというと、インドの言葉で、「かあかあ」っていうんです。「かあかあ」というのが、ずっと中国、朝鮮を伝わって日本に移ってそれで日本でそれが仏教で伝わってきて、仏教の階級では「かかさま」、一般庶民では、おっかさん、お母さん、とこうなったらしいです。お母さんということはですね、いつもにこにことしていらっしゃる方と、こういう意味です。覚えていて下さい。そしてね、ウカンムリに女で安らかでしょう。安らぐですね。ウカンムリに女は安らぐけれども、父にしたら安らがないのです。父の仕事はなにだといったらウカンムリです。ウカンムリっていったら、屋根ですよね。屋根って雨漏りがしたりねした時、「お父さんちょっと屋根漏っているからちょっと直ってきて下さい、」って言ったら、「ホイッ」てすぐ直すようなお父さんの仕事ですよ。だから、お父さんが子供にネチャネチャと「よーかわいい」と抱きしめるような生ぬるい事は、いけないと私は思うんですよ。父には父の仕事が、母には母の役目があるのにですね。この頃なんかその、どこかで間違いがおこりましてね、それぞれの仕事が別になってと思うんです。父が、たとえば子供が幼稚園の子が「ただいま」と帰ってきてお母さんがおらなかつたら、お父さんが「お帰り」と言つたって、「あんたじゃないんだ。お母さんだ。」とお父さんが言つますよ。お父さんだと帰つてもうれしくないんです。お母さんが待つてくれて「お帰り」って言ってくれるからうれしいんですよね。お父さんの本当の愛情というのは厳しい世の中に立ち向かって、妻や子どもを養つて生きるその根性、それが父の愛情でしょう。それが男の愛情と知つたらお医者さんがなにをするべきか判るはずでしょう。お医者さんは命を救う、私はこう思う

んです。また父は安らぎを持たん。父は屋根である。雨漏りがしないようにすることとおもつていただきたいと思います。

次に3年生の文を聞いて下さい。「洛南で私が学んだ事は今日お話がありましたが、3つの校則に集約されると思います。1年の時の校長先生の話、また担任からの注意、いつも人の話は素直に聞け、聞ける自分であれという事です。素直であれ、正直であれ、愚直であれ、努めれば努めるほど、それまで自分のひねくれた素直でない事がはっきりと見えてくるようであった。頭で解っていても腹の底まで素直にならない自分にやるせない気持ちを持っていました。そういう自分に気付くことが出来たのは何よりも大きな収穫であったと思います。「自己を尊重せよ」、入学当初は単に自己主張をはっきりすることくらいに受け止めていましたが、今はそうでなく、素直に自分を大切に守っていく事と考えています。次に真理を探究することを学びました。洛南に入りたいと思ったのは正直言って京都大学などの有名大学への進学がきっかけでした。しかし入学後担任の先生のお話を聞いて、特進3類の目標は大学入学だけではないことを知りました。つまり3年間あえてつらい勉強に努めることにより、人間的成長を計ることであることを知りました。僕はすばらしい学校に来たと本当に喜びました。今3年振り返り、16歳から18歳の大切な時期を修養に努めることができたと思います。本日の話にありましたように真理を探究するには、片時も休んではいけないことを痛感しました。国公立の2次試験まで40数日、洛南で学んだ事を生かし研鑽に励みたいと思います。最後に社会に献身せよですが、洛南に在学中はなかなか出来なかったと思います。少しきてきただけは御影供に募金運動したことです。これによって洛南の精神を身をもって表現出来たことは僕にとって大きな喜びとなりました。このことを生かし、生涯を通じて社会に献身するように努めて行こうと思います。僕は将来どんな職業につくか判りませんが、どんなことでも自分にできる精一杯のことをしたいと思います。自己を尊重せよ、真理を探究せよ、社会に献身せよ。この3つの校訓を洛南卒業の僕の大切な教訓として、宝物として素直に生きた学問をし、社会に役立つ人間になるように努力します。入学当初、校長先生に菩薩になれとそれが目標だといわれましたが、僕は努力不足のためまだまだ、上記にはなりきれないと思います。昭和の無明の光を照らすには、雑巾ふきの精神が必要だと思います。この先何年かかるかわかりませんが、必ず社会の一隅を照らすようにいぶし銀のような人間になりたいと努力したいと思います。」ということです。

沢山、こういう事を沢山私に残してくれたんです。何編話して判らないほどありますが、まあ色々申しますが、私が今日の先生方にお願いしたいことは「色々のことがありましても洛南高校の3年間の時代を思い出し、そして担任の恩師を思い出し、そしていろんな先生方のお言葉を思い出し、そして自分に言い聞かせて下さい。人間は叱り手がないと寂しくなります。本当に叱ってくれる鞭が無かったら、愛の鞭が無かったら教育は成り立ちません。そのように私は思います。沢山話したいことが山ほどあるのですがこのくらいにさせていただきます。ご静聴ありがとうございました。

(拍手)

この冊子は第2回医療分科会における三浦先生の講話を先生のお許しを得てまとめたものです。